

## 特発性血小板減少性紫斑病（ITP）の発症における歯周病菌の関与の検討

藏満保宏、北川孝雄、中川宏治、小林正伸

### 【背景】

特発性血小板減少性紫斑病は、血小板膜蛋白に対する自己抗体が発現し、血小板に結合する結果、主として脾臓における網内系細胞での血小板の破壊が亢進し、血小板減少を来す自己免疫性疾患である。病因は不明であり、抗体産生機序は明らかになってはいない。原因の一つとしてピロリ菌感染が考えられており、除菌療法にて50-60%程度が軽快することが知られている。それ以外の患者については原因不明であるが、私たちは最近、歯周病菌の *Aggregatibacter actinomycetemcomitans* が血小板の GpIIa/IIIb と交差反応を示す抗原を保有している可能性を見出した。

### 【目的】

本研究では、特発性血小板減少性紫斑病の発症要因に歯周病、歯周病菌 *Aggregatibacter actinomycetemcomitans* が関与していることを明らかにする。

### 【意義】

従来、ヘリコバクター・ピロリ菌の除菌療法以外には副腎皮質ステロイドの投与による抗体産生の抑制を図る治療法以外効果的な治療法がなかったが、今回の検討にて新たなメカニズムが解明されれば、歯周病治療によって特発性血小板減少性紫斑病の軽減が可能になると期待できる。

### 【研究方法】

愛育病院に通院する特発性血小板減少性紫斑病患者さんに研究内容を説明の上、承諾が得られた方から検体を採取する（もしくは保存血清の提供を受ける）。（末梢血 5ml）

#### 1. 自己抗体の歯周病菌に対する反応の確認

1) 特発性血小板減少性紫斑病の患者さんより末梢血を 5ml 採取する（愛育病院にて）（もしくは保存血清の提供を受ける）。

2) 血液を先端研究推進センターに輸送後、血清を分離し、各種歯周病菌のライゼートに対する反応を2次元電気泳動を用いたウェスタンブロットにて確認する。

#### 2. 特発性血小板減少性紫斑病の患者の口腔内細菌のレパートリーの検索

1) 特発性血小板減少性紫斑病の患者の唾液（うがいや歯磨き前の唾液 3-5ml）を採取する。

2) 次世代シーケンサーを用いて口腔内細菌のレパートリーを検索する。

目標症例数：20 例

対象年齢：成人

以下の情報を、愛育病院より収集する。

①性別、②年齢、③検体採取の日時、④ITP の病態

これらの情報は、インターネットにつながっていないコンピューターを新たに購入し、個人識別情報管理者がファイルとして管理する。解析は必要に応じて、研究分担者が行う。

期間」：

本共同研究にかかる倫理審査委員会承認日（当該日の場合は、当該日以前に倫理審査委員会の承認を得ていること）から令和6年3月31日まで